

2015年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告

春日由美
宮内孝
古賀隆一
金子幸
黒川久美

はじめに

南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターでは2010年4月以降、地域貢献と学生の学びを目的とし、「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」などの活動を行ってきた(春日ら, 2015など)。「子育て支援室」は臨床心理士でもある学部教員1名が地域の子どもや子育てに関する心理相談を受ける活動である。「チャレンジ運動教室」は体育が専門の学部教員1名と学生ボランティアによる活動で、運動の苦手な子どもたちと保護者に運動遊びを体験してもらう活動である。「あそびの教室」は美術が専門の学部教員1名と学生ボランティアによる活動で、地域の子どもと保護者を対象にした工作遊びを体験してもらう活動である。これら3つの活動は、子育て支援センター開設当初から毎年継続している活動である。また2015年3月のトライアルを経て、5月より子育てひろば「みなみん」を本格実施している。「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」「みなみん」では、学生がボランティアで参加することで、学内で実際に子どもや保護者と触れる機会になり、地域貢献と同時に、将来子どもに関わる仕事を目指す学生たちの学びの場にもなっている。本報告では、2015年の「人間発達学部附属子育て支援センター」の活動について報告する。

1. 子育て支援室

子育て支援室では、2014年までと同様に、大学の地域貢献を目的に子どもや子育てに関する相談業務を行った。相談内容は①子育てについて、②子ども自身の問題について、③親子関係につ

て、としている。子どもの年齢は限定せず、保護者のみの相談や、教員の相談も受けている。スタッフは人間発達学部教員1名(臨床心理士)である。相談は完全予約制で、1月～3月は毎週火曜日、4月～12月は毎週月曜日の13時から17時に行った。受理面接の予約は、都城キャンパスの事務部で電話を受け、その後担当教員が申込みの受付をし、受理面接日を調整して行っている。

毎週、継続中のケースや新規のケースにより、ほとんど予約は埋まっている状況であり、昨年以前からの継続ケースを含めた2015年1月～12月の面接日数は39日、面接回数は延べ124回であった。2015年の相談内容は、不登校・園やその傾向、発達の偏りや遅れ等、子どもの性格や行動等、子どもへの対応や育児不安などであった。相談を受けた子どもの年齢は幼児から10代後半まで幅広く、男子10名、女子11名の21名に関する相談を受けた。2015年1月から12月の相談業務に関する統計資料および今後の課題は別にまとめる(春日, 2016)。

2. チャレンジ運動教室

(1) ねらい

近年の「都市化による遊び場の減少」「少子化による遊び仲間の減少」そしてテレビゲームやコンピュータゲームなどの「子どもの遊びの変化」などにより、子どもが身体を思いっきり動かして遊ぶ機会は、減少の一途をたどっている。そのため、「遊ぶ楽しさを味わっていない子ども」「運動に苦手意識をもっている子ども」「動きの発達が未熟な子ども」の増加が問題となっている。

そこで、これらの問題解決の一助として、2010

年度より「チャレンジ運動教室」を開催した。この教室は、運動が苦手な子どもを対象とし、その保護者も参加することが条件となっており、参加者はこの6年間で1300名を超えた。

保護者、子どものそれぞれのねらいは、次のとおりである。

・保護者…子どもと一緒に「運動遊び」を楽しみながら、子どもの心身の発育発達の様子を観察したり、それぞれの動きの指導法を身に付けたりする。そして、この教室をきっかけに家庭生活の中で、「運動遊び」を楽しむ時間を積極的に設定して、子どもの心身の発達を促そうとする態度を育てる。

・子ども…「運動遊び」の楽しさやできない動きができる楽しさを味わって、外で思い切り遊ぶ意欲と態度を育てる。

(2) 2015年度の教室の概要

1) 参加申込者：250名

- ・幼児（5.6歳）とその保護者 50組
- ・小学校1.2年生とその保護者 79組

2) 実施回数：14回

- ・前期の部 7回（5/30, 6/13, 6/27, 7/4, 7/11, 7/18, 7/25）
- ・後期の部 7回（10/17, 10/31, 11/7, 11/14, 11/28, 12/12, 12/19）

3) 教室の内容

幼児の部は、走る、跳ぶ、投げる、捕る、支える、回る等の基本的な動きを取り上げて、それぞれの動きの体の動かし方や動きの感じを身に付けるようにした。

小学校の部は、3年生時から学習する「かけっこ」「器械運動」「ボールゲーム」などの運動につながる動きを取り上げて、その動きができるようにした。

各部とも、親子でやさしい動きから難しい動きへと挑戦できるようなゲームを多く取り入れて、課題とする動きが身に付くように配慮した。

4) 子ども教育学科学生の参加者：のべ290名
本教室参加を希望する学生が、授業科目「子ども支援地域活動」の一環として、参加した。教室

開始1時間前に、子どもへのかかわり方や運動指導のポイント等についての事前指導を行った。教室が始まると、担当するグループのマネージメントやつまずいている子どもへの支援を行わせた。教室終了時には、学生一人一人の反省や学びを話し合う事後指導を行った。学生にとっては、保護者や子どもとのコミュニケーションのとり方、子どもの発育発達の違いや運動指導法などについて体験的に学ぶ機会となった。

(3) 今後の課題

・参加者が多くなり、子ども一人一人の動きの変容の把握が困難となっている。そこで、保護者による評価が可能となる尺度を作成して、この課題を解決したい。

・大学での授業の学びと本教室での学びとを有機的に関連づけるための手立てを検討する。

3. あそびの教室

地域の親子が参加できる活動として、2010年の学部新設年からはじめた本活動は、6回目である。2014年に引き続き「あそびの教室」第6回「創作けん玉を作ってあそぼう」を企画し、2015年10月25日（土）に開催した。この「あそびの教室」は、単に子どもを遊ばせるだけのイベントではなく、親子で活動に参加してもらうことで、①家に帰ってからも親子であそぶヒントになるような遊びの提案、②子どもだけでなく親も一緒に遊ぶことで、あそびによる成長と創造の楽しさや大切さを体験してもらうことを目的とした。また準備から当日まで、教員だけでなく学生も参加することで、学生のボランティア精神と創作教育につながることも目的としている。以下、第6回の取り組みである、動物や昆虫、船や飛行機、樹木や家のダンボールによる遊具のあそびと「けん玉工作教室」について報告する。

(1) スタッフと準備

(a) スタッフ

人間発達学部の教職員4名と子ども教育学科1年生6名、4年生3名が参加した。この活動への学生の参加は授業科目「子ども支援地域活動」の

一環でもある。

(b) 準備

準備は6月から10月までの間の内8月中旬～9月の夏季休業を除きおよそ3カ月間である。教員と学生で、会場に設置する段ボールと広告の紙で作った動く船や魚、樹木、子どもの家、動物(キリン、馬、犬、豚等)、昆虫(蟻、クワガタ、カブトムシ)ゴジラ等の作品である。昨年のゴジラ60周年関連に続く作品で、本年度はウルトラマン制作に取り組んだ。工作のテーマとしては犬やキリンといった特徴があって制作し易い工作を中心に、制作の提案を続けてきたが、子どもの心にインパクト、驚き、関心を喚起したいとの思いもある。当日親やスタッフが見本や子どもが遊べるような作品等を、課外の時間に制作した。動く玩具としてキャスターを取り付け、遊びの範囲を広げ、前年に引き続きコンパクトリヤカーを遊具のベースに使った本格的な動くウルトラマンの遊具を試みた。

また教員が広報(都城市や三股町の広報課に協力戴く)、傷害保険の手配、FAXでの参加者の受付を行った。

(2) 当日の活動

「あそびの教室」前日の2015年10月24日(金)に、4年ゼミ生と1年の有志学生で体育館内に段ボール遊具の作品を搬入した。当日2015年10月25日(土)は、9時から12時の間(3時間)、体育館を使って実施した。参加者は幼児(5～6歳児を中心に3歳以上の未就学児)と小学生の親子10組、計24名であった。工作の内容は①風船を使った剣玉の玉部分や剣になる部分の基本素材をあらかじめ学生と教員で作ったものを準備して作品のベースに使用する。②ダンボールや、広告の紙を2倍に薄めた接着剤(ボンド)を使って貼っていく張り子の技法である。①②共に教員から説明を行い、学生ボランティアは主にあそびのパートナーとして活動し、教員が親子の工作を手伝った。乾燥の手間がかかるので時間内に終わるように衣類乾燥機と段ボールを利用した乾燥箱を2台制作し活用した。時間短縮のために、玉の

制作と剣と皿の各部品は、学生ボランティアの事前の制作協力で支えられた。

(3) アンケート結果と今後の課題

親へ協力をお願いしたアンケート結果では、「楽しかった」「ためになった」「また『あそびの教室』にきたい」は回答者全員が「はい」という意見であり、「家に帰ってから、やってみようと思う」と「子どものことで、これまで気がつかなかった発見があった」に関してはやや消極的の反応が一部みられた。しかし子どもが自由に使えるダンボール遊具での遊びは、参加者には非日常の有意義な活動になったと思われる。今後親が子どものことに注目しやすくなるような配慮や工夫することを更に検討したい。自由記述項目では、楽しかった、機会を増やして欲しい等の意見があった。また、今後も続けて欲しい、更に創造意欲が増したようだ、家でも作って楽しみたい、布団乾燥機が作品の乾燥に利用され「工作教室に工夫が見られる」等の意見もあった。

今年のテーマも初回より一貫して親子(幼児・児童)で関わる工作である。工作は大人が積極的にならないと幼児・児童の参加は難しい。ダンボールと紙を使うのは幼児・児童の遊びで大切な安全を中心に考えているからである。素材の紙から様々なアイデアやイメージを創りだすあそびが工作の意味であり、親が制作をしている姿を幼児が見ながら僅かでもお手伝い参加とあそびに興じる姿をイメージして企画している。工作は本来制作しているその時間が“楽しい遊び”であり安易に結果(作品の出来不出来や、出来栄え)を求めるべきではない。この活動は遊びを主体とした幼児・児童の参加に重きを置くもので、工作は親が積極的に制作の姿を見せて欲しいと願うものである。今後の活動の要望についても、幾つか新たな活動の提案もあり更に検討していきたい。

昨年度から活動内容の課題、進行の方法などの問題点を克服する為に、短時間ながらオリエンテーションを行い、子どもの自由画表現やあそびとしての工作の本来あるべき姿を説明した。工作は完成を目的とするのではなくプロセスの大切さ、試行錯誤の重要性といった幼児造形教育の理

論を参加された保護者の方に解説した。「手を創造的に使おう。失敗も制作である。」というのが更に継続目標である。

今回は「あそびの教室」の6回目であったが、活動の参考になることが数多くあり、更に次年度以降も少しずつ改善しながらよりよい活動を作り上げていきたいと考えている。

4. 子育てひろば「みなみん」

近年、待機児童の増加や保育士の人材不足が問題となっているが、3歳未満の子どもを持つ家庭の8割は家庭で子育てをしているというのが現状である。また、核家族の中でも「単身世帯」、「夫婦のみ世帯」が増加しており、周囲に子どもを持つ世帯がないなど、子育てが孤立しがちな環境が増えてきている。そこで、地域の子育て家庭を支援することを目的に、子育て中の親とその子どもが気軽に集え、子育てに関する悩みや不安をお互いが共有できる場を提供しようと、今年度から子育てひろば「みなみん」を本格的にスタートさせることにした。併せて、学生がボランティアで参加することで、幼い子どもや親と触れ合う機会となることも意図した。

(1) 実施の概要

①実施回数：計12回（5月～12月）

2015年5月から、原則月2回の取り組みとした。前期は、第2・第4月曜日、後期は、第2・第4火曜日に実施した。実施時間帯は午前10時～12時とした。実施日は以下のとおりである。

5月	18日
6月	8日、22日
7月	13日、27日
8月	24日
9月	7日
10月	13日、27日
11月	10日、24日
12月	8日
1月	26日
2月	9日

②利用者数

5月～12月までの計12回の実施で、利用した保護者の人数はのべ252人、子どもの人数はのべ303人であった。

③学生参加数

参加学生については、前期はボランティアとして自主的参加の学生が主であった。後期に関しては、授業時間割の関係上、ボランティア参加の学生確保の困難さが予想されたため、子育て家庭支援論受講の3年生と教職実践演習受講の4年生が輪番で参加するようにした。同時に1年生の参加も若干名あった。5月～12月までの計12回の実施で、学生の参加人数はのべ204人であった。

④運営スタッフ

子育て支援センターのパート保育士であるYさん、4年生のIさんを中心として準備、運営を行った。学部教員も3名参加し、学生へのアドバイスやVTRカメラによる記録を行うと共に、保護者からの相談などがあった場合には対応ができる体制をとった。

(2) 取り組みの実際

毎回、実施日の1週間前に参加学生が集まり、準備会を行った。準備会では、帰りの会の役割決めや手作りおもちゃの作成、既存のおもちゃの消毒等、実施日に向けての準備に取り組んだ。また、実施の案内・広報に関しては、行政（都城市、三股町）や近隣の子育て支援センター等や店舗などに、学生たちが分担してチラシ・ポスターを持参しお願いするようにした。

帰りの会では、パネルシアターやペープサート、絵本の読み聞かせ、手遊びやわらべうた等の実演を学生たちが分担して行った。

実施当日は、学生は9時に集合し、環境構成、最終確認を全員で行った後、10時から12時までの親子の来館にのぞんだ。開放している間の利用者の出入りは自由である。その後、運営スタッフ、参加学生全員で反省会を実施し、次の活動に生かすようにした。活動の流れは以下のとおりである。

表2 活動の流れ

9：00～	学生集合 →環境構成（受け入れ準備、掃除等）、 終わりの会りハーサル
10：00～	親子の受け入れ →受付、子どもにはネームテープを 作成
11：30～	帰りの会 →手遊び、パネルシアター。ペープ サート、絵本 等
12：00～	片付け
12：10～	一言反省会

(3) 今後の課題

今年度の取り組みをとおして、子育て支援への学生の関心は深まったといえるが、次年度以降、学生の参加をどう恒常的に確保するかが最大の課題と言える。関心はあっても、授業との関係で参加できない学生が今年度後期において特に2年生を中心にみられた。学生が参加できる条件づくりについて知恵を絞り、開設日・時間の設定のし方等工夫する必要がある。

まとめ

以上、人間発達学部附属子育て支援センターの活動について2015年度の取り組みを報告してきた。「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」の3つの取り組みは地域に根ざしたものになってきている。加えて、今年度は「子育てひろば・みなみん」を新たな取り組みとしてスタートさせることができた。この活動も地域に定着していくよう、次年度以降も継続して行っていきたい。

2015年4月から子ども・子育て支援新制度がスタートした。新制度は、保育所や幼稚園、認定こども園等の保育施設を利用する子どもの家庭だけでなく、在宅の子育て家庭を含むすべての家庭及び子どもを対象とするものである。新制度には「地域子ども・子育て支援事業」として13の事業の推進が掲げられている。その中には、地域子育て支援拠点事業等の他に放課後児童クラブ（放課後児童健全育成事業）も含まれている。乳幼児期から児童期・思春期に至るまで、子どもと親・家

庭を支援する取り組みを社会全体で一層充実させていくことが求められている。本学部の子育て支援センターも、地域の子ども・子育て家庭が抱える困難や願いを更に掘り起しながら、現在取り組んでいる子育て支援の質的向上を図ることに努めるとともに、例えば、発達障害等特別な支援を必要とする子どもへの放課後支援等、支援の幅を広げていきたいと考える。

引用文献

- 春日由美・宮内孝・古賀隆一・黒川久美・内田芳夫（2015）2014年度人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究, 5, 109 - 113.
- 春日由美（2016）2015年南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターにおける子育て支援としての子どもに関する相談業務報告 南九州大学人間発達研究, 6, 127 - 130.